
父の娘

スケープゴート

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

父の娘

【Nコード】

N7584L

【作者名】

スケープゴート

【あらすじ】

少女と彼女たちとの会話

「死ねばいいじゃない」

水面に住む青い髪の彼女が言う。

「馬鹿。そんなに簡単なことじゃないのよ」

わたしはそう返す。

水面の中の彼女は首をかしげた。まるで橙の瞳が淡く輝く。

「簡単じゃないなんてどういうことかしら」

「難しいってことでしょ」

後ろの樹の陰に住む亜麻色の髪の彼女が応えた。

「どういうことが難しいの？」

水面の彼女は馬鹿だった。

樹の陰の彼女は答えない。わたしが応えなくちゃいけないのか。

「いやなことがある度に死んでたら、この世界に誰もいなくなるわ」

樹の陰の彼女は目を細めてほほ笑んで、水面の彼女は頬を膨らませてむくれた。

「違うの！死ぬのが難しいのはなんでってこと！馬鹿じゃないの！？」

してやった顔で馬鹿じゃないのって繰り返す彼女。

「死ぬのは簡単だよ。難しいってのは、死ぬことでいやな物から逃げるのが難しいってのよ」

「あら、死ぬのが簡単なら死ぬことでいやな事から逃げ出すことも簡単なはずでしょう？死ねばいいんだから」

樹の陰の彼女がおかしそうにわたしを見て言った。

「ああ、言われてみれば」

「馬鹿じゃないの！」

こういうときの水面の彼女は鬱陶しい。

「なにに対して難しいと感じたのかな」

「死ぬことに対してでしょ」

「死ぬのは難しいの？」

水面の彼女は馬鹿じゃないのというのをやめて、樹の陰の彼女を眺めた。

「あら、死ぬことは簡単よ。山2つ先の小さな家で人が二人死んだわ」

風の彼女が淡い緑の髪をなびかせてわたしたちの耳元に囁き通り過ぎて行った。

「そうだよ！ほら、死ぬことは簡単よ。だから死ねばいいじゃない」

水面の彼女が嬉しそうに笑ってわたしを見る。

「死ぬという考え方は個人の意識に依存するのよ。あなたが難しいと思えば難しい、簡単だと思ったら簡単なの」

樹の陰の彼女は口元の笑みの形を崩さないままに言った。

「じゃあ、わたしが死ぬことは難しいと思ったから簡単じゃないと言ったのかしら」

「そうかもしれないわね」

「おい、なにやってるんだ！はやくこっちに来ないかグズ！！」

森の入口から聞こえてきた男の太い怒鳴り声。その声がわたしの耳をなぶったとき、世界が沈黙した。

「…今行きます！」

泉を覗きこんでいた恰好から立ち上がった。太い男の声はわたしの父の声。働かないで酒ばかり飲んで、枝を拾うのにもわたしを行かせるダメな男。わたしは今までいたところを振り返りもせずに、拾った枝を持って走り去った。

泉の底には小さな橙色の目をした幼い少女が、樹の陰には亜麻色の髪をした女性が、森のもっと奥の方の崖では物知りの女性が眠っている。

彼女たちは父によって殺された、あるいは父が原因で自殺した哀れな女性たちだった。

わたしを父の娘だと知っていてもわたしに語りかけてくるのは、わたしが父の事を殺したいと思っていることを見抜いているからだろうか。

（後書き）

最初のセリフ「死ねばいいじゃない」から発生した話です。
とくにこれと言った意味とかありません。

誰が得する？私だけです。

読んでくださってありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7584/>

父の娘

2010年10月9日02時34分発行